令和４年度　第１回　静岡県食と農が支える豊かな暮らしづくり審議会　議事録

日時：令和４年１月 13 日（金）
午後３時 10 分～16 時 30 分
場所：中遠総合庁舎東館３階 303 会議室

１　開会

（中尾農業戦略課長）

皆様、現地調査お疲れ様でした。

それでは、皆さんお揃いになりましたので、ただいまから、令和４年度第１回静岡県食と農が支える豊かな暮らしづくり審議会の議事のほうに入っていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

私は農業戦略課長の中尾でございます。しばらくの間、進行役を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

本日の委員の皆様の出席状況につきまして報告をいたします。当審議会委員 15 名のうち、本日８名の委員の皆様に御出席をいただいております。「静岡県食と農が支える豊かな暮らしづくり審議会規則」第５条第２項の規定による定足数の過半数を満たしておりますことを御報告申し上げます。

また、本日の審議会は、県の「情報提供の推進に関する要綱」第２の規定に基づき、全て公開としております。本日の傍聴者はございません。

２　審議会委員紹介

（中尾農業戦略課長）

続きまして、今回の御出席の委員の皆様及び県側の出席者につきましては、次第を開いていただきますと出席者名簿をそれぞれ添付しておりますので、御確認いただきたいと思います。

なお、落合委員におかれましては、本日 Web での御出席をいただいております。ありがとうございます。よろしくお願いいたします。

３　議事

（中尾農業戦略課長）

それでは、議事に移りたいと思います。

本日の審議につきましては「静岡県民の豊かな暮らしを支える食と農の基本条例」第 20 条第２項の規定に基づき開催するものであります。

ここからの議事進行につきましては、審議会規則第５条第１項の規定により、会長にお願いいたします。森田会長、よろしくお願いいたします。

（森田会長）
本日の審議会の会長を務めさせていただきます森田です。よろしくお願いいたします。
本日も委員の皆様の御協力により、議事を円滑に進めてまいりたいと思いますので、御協力をよろしくお願いいたします。
落合先生、聞こえていますでしょうか。大丈夫でしょうか。よろしくお願いいたします。
それでは、議事のほうに入りたいと思います。次第にございますけど、本日の議題は１点、「農業を取り巻く情勢及び現地取組に関する意見交換」ということとなってございます。
最初に、事務局から「農業を取り巻く情勢」について御説明いただいた後、委員の皆様から、本日の現地視察をふまえて御意見をいただく、という形で進めてまいりたいと思います。
それではまず、事務局から御説明をよろしくお願いいたしします。

（中尾農業戦略課長）
はい。農業戦略課の中尾でございます。私から「農業を取り巻く情勢」につきまして、説明をさせていただきます。
資料を３枚ほどめくっていただきますと、Ａ４横のカラーの資料が添付されております。右上に資料１と書かれております。こちらの資料を御覧ください。
最近の農業を取り巻く主な情勢としまして、担い手の減少、SDGs の広がりなどに加えまして、ロシアのウクライナ侵攻等により、食料安全保障上のリスクの高まりを受けており、国におきまして、農政の根幹であります「食料・農業・農村基本法」、こちらにつきまして、制定後 20 年経つわけですけども、今回初めての総合的な検証を行うということで、見直しに向けた検討を開始するということで国が動いております。
資料の左側の枠内に記載のとおりですけども、現状の農業を取り巻く情勢の変化ということで、「生産者の減少や高齢化、農地面積の減少」、「人口減少等による国内市場の縮小」「国内外での地球環境等への配慮のルール化」に加えまして、「国際的な需要の増加による生産資材等の長期的な価格上昇、調達の不安定化」を挙げております。
国では今後の施策の展開方法としまして、中央のところに示してあります４つの項目、「スマート農林業等による成長産業化」「農林水産物・食品の輸出促進」「農林水産業のグリーン化」「食料安全保障の強化」を展開していくということとしております。
これら４つの施策を展開する上での今後の検討課題としまして、右側の枠内にあります、スマート技術等の活用による担い手の育成をはじめ、農業のグリーン化では、「堆肥等の未利用資源の利用拡大」や「消費者の選択を容易にする取組の見える化」などを検討課題として挙げております。
また、本年度に入りまして、ロシアによるウクライナ侵攻を背景としました国際的な原料価格の上昇や円安の影響など、食料安全保障が新たなキーワードとしてクローズア

ップされておりまして、この「食料安全保障の強化」が一つの柱として検討課題に加わってきております。この中では、小麦、大豆、飼料作物について、「輸入依存からの脱却に向けた生産構造の転換」や、「生産・流通コストを反映した価格形成を促すための枠組みづくり」などが検討課題として挙げられております。右下に記載のとおり、国では、この「食料・農業・農村基本法」の検証・見直しを今年の６月にとりまとめまして、24年通常国会への提出を目指しているところであります。

次に、１枚めくっていただきまして、右上に参考資料１と書かれた資料を御覧ください。このグラフは、国がとりまとめ公表しております「農業物価指数」の農産物と農業生産資材の価格指数の推移をまとめたものであります。こちらにつきましては、令和２年を基準、100としまして指数化したものであります。このグラフの中の点線の部分が農産物の価格指数、実線の部分が生産資材の価格指数を表しております。

見ていただきますと、令和２年以降、実線の生産資材の価格指数につきましては、右肩上がりで上昇しているのに対しまして、点線の部分の農産物につきましては、増減はあるんですけれども、概ね横ばいで推移しているという状況が御覧いただけるかと思います。

次に、１枚めくっていただきまして、右上に参考資料２と書かれたものを御覧ください。こちらは、農産物の価格がどのように形成されているかというものを示す資料で、農産物の流通経路を説明する資料になっております。

現在の農産物の流通につきましては、上の図、カラーの色塗りされた部分のルートのとおり、出荷したものが卸売市場に出荷されまして、仲卸業者等を介して小売店等に販売されて、消費者に届くというルート、これが現在主流になっているところです。下のグラフを見ていただきますと、国産の青果物の卸売市場経由率の推移があります。経由率自体は、年々減少傾向にあるわけですけども、現状においても約76%は市場を経由している状況になっているところです。

こういったことから、現状、産地直送であるとか、直売所、ＥＣサイト等の活用等による直接販売が増加しているわけですけれども、やはり農産物価格は、市場における需給バランスにより価格が形成され、それが指標になっている状況にある、というところでございます。参考までに御承知いただきたいと思います。

次に１枚資料めくっていただきまして、資料２でございます。こちらにつきましては、昨年度、皆様に御審議をいただきました、静岡県食と農の基本計画の概要になっております。

先ほど国の施策展開、４つ施策展開があるというお話をさせていただきましたけれども、国の施策展開のうち、スマート農業につきましては、本計画の左側、基本方向１の（１）「デジタル技術等を活用した農芸品の生産向上」に位置づけておりますし、農業のグリーン化につきましては、その下の（２）「農業生産における環境負荷の軽減」、輸出の促進につきましては、中段、下の（４）「市場と生産が結びついた“ふじのくにマーケティング戦略”の推進」というところで、３つの国の施策の方向性については、明確に

こちらのほうに位置づけているところでございます。
国のほうで今回一つの柱としております食料安全保障の強化の、生産・流通コストを反映した価格形成を促すための枠組みづくりにつきましては、基本方向２の都づくりであるとか、農村との交流促進などにおきまして、消費者の理解に向けた施策を講じておりますけども、この部分につきましては、今後、国のほうの施策が具体化した中で、私どもの基本計画の中にも位置づけをしていくのかと、そういったところも含めて、今後、検討していく必要があると考えております。
私の説明は以上であります。

（森田会長）
ありがとうございました。それではここから、ただいまの事務局からの説明、又は本日の現地調査、現地視察を含めて、委員の皆様から全体を通じて、御意見、御提案等をお伺いしたいと思っておりますけれども、まず最初に、今の県からの御説明について、何か御質問とかあったらお願いできますでしょうか。よろしいでしょうか。
基本法、国の施策の方向性という形で資料１、最近の資材の高騰等の状況、価格等の状況、あとは流通経路について参考資料の１と２と、そして、静岡県での食と農の基本計画について資料２という形になっております。よろしいでしょうか。
それでは今回、審議会の出席者名簿あいうえお順になってるんですけれども、その順番で意見を伺っていきたいと思っております。
Web で参加の落合先生、３番目に御意見を伺います。よろしくお願いいたします。
それではまず最初に石田委員から、今日ちょっと雑ぱくな意見の伺い方ですけども、今日の現地調査の感想でも構いませんし、又は価格ということで、生産側から見た時の今の価格の設定の仕方とか、コストの実際の値上げ等の状況など、色んなことをふまえて御意見いただければと思っております。また、せっかく県の各施策の担当者もいらっしゃいますので、せっかくの機会ですのでこんなことも聞いてみたいということがあれば、御自身の発言の時にぜひ御質問いただければと思っております。よろしくお願いいたします。すみません、前置きを。

（石田委員）
はい、それでは最初トップバッターということで、私から今日の農場、ほ場を見学させていただいた感想と、あと自分が日頃考えていることをお話させていただければと思います。
今日は、スマート農業の取組をされている高橋さんの農場と、あとは大角さんの有機の農場ということで２か所、ある意味ちょっとこう相対的というか、省力化のほうと、手をかけて、というそれぞれ最適な取組をされているという印象を受けたんですけれども、どうしても省力化になってくると、規模の大きいところからそういうものってやっぱり取り入れられてきて、小さな生産者まで回ってくるのにちょっとタイムラグがやは

りまだあるのかなと、ちょっと危機感を受けました。その中で、やはり自分達でできるところをやっていくということかと思うんですけれども、正直、規模のことを言っちゃうと、自分は日本だけというよりは世界、もっと規模の大きいところはいくらでもありますので、やはりそちらのほうがどうしても進んでいくのかなと。今日はヤンマーのやつやってましたけども、私が以前、ヨーロッパにいた時にクボタが、日本ではまだあまり使っていない機械を向こうではどんどん出している。やはりもうそういう形で、世界ではどんどんそういう方向で進んでいきますし、日本の立ち位置は、できるところはもちろんそれを取り入れていけばいいんでしょうけれども、まだ日本に浸透するのはちょっと時間がかかるのかなというような実感は持っています。

あと有機の大角さんのほうなんですけれども、大角さんがさかんにマーケティングについて何かっていうことをおっしゃってましたけれども、自分は最後に質問させていただいたような形で、あれだけの若い人達が引き継いで、魅力を感じて惹きつけている、やはりそれの積み重ねじゃないのかなと。ああいう形で色んな話を今日伺いながら、楽しそうにお話される姿、ああいうものがやっぱり人を惹きつけていくんじゃないかなと感じて聞いていました。

私、養鶏やってるものですから、養鶏っていうのは本当に、今で言う規模拡大、その最先端、物価の優等生とよく言われるように、規模拡大してきた状態なんですけれども、やはりそれが行き着く先というのはどういうふうな結末になっていくのか。去年１年間でそこの業界の中で非常に大きな動きが２つあったんですけれども、日本の中で１位、２位を争っているイセとアキタ、この会社が２つ、一つは汚職、政治家を使った形で捕まって、もう一つは会社更生法という形で、経営者も変わるんですけれども、そうなった時に、大きいところだけが残っていけばいいのか。よくこの話も最近するんですけれども、今、世界のニュースをよく聞いてると、アメリカのインフレ率、ヨーロッパのインフレ率、すごい勢いでこう上がってますよね、それに対して日本というのは、割とこう押さえられてる。これの緩衝材がどこになってるのかなと自分いつも考えるんですけれども、これは結局、中小のほうかな、結局、給料を取らない、自分達の人件費を取らないで食っていければいいと、そこで吸収して、それが緩衝材となって日本の物価というのが維持されている、やっぱりそういう農業の位置づけというのを、もうちょっとクローズアップするべきだと思って、いつもニュースで聞いています。農政としてもっと逆に訴えてもらいたいと思うし、農家さん達がそれだけ頑張っている姿をもっと国に、他の工業界とかそっちのほうにも、もっとはっきり示してもらいたい。常々それは思っています。

去年の６月だったかな、一番衝撃的な事件、事故が起きたのが。愛知で、川の底が抜けて、水が田んぼに使えない、ちょうど農繁期の時で水が必要な時に、工業優先で水を流しましたよね。あれが今の日本の本当に姿を現してると自分はあのニュースを見て１人で怒ってたんですけどね。やはり経済的にたしかに、工業のほうが経済規模としては大きいんでしょうけども、やはり農業がそんなに下に見られてるのかなっていう、ちょ

っと自分はあのニュース非常にがっかりして聞いていました。
　そういうことでやはり、今の中尾課長からお話のあった価格に対してもそうなんですけれども、消費者からじゃなくて、自分は生産者から、もっともっとアピールすべきだと思うし、付加価値という自分達の価値、それをもっと声を出していく、それがやはり農業の価格の見直し、ある程度その自分達で地位を作っていくことになっていくのではないかと、これは常々考えています。
　その中でやはり静岡県というのは、川勝知事もよく言っておられる、本当に種類の多い県で、339 品目ですか、それだけ多様性のあるということで他に類がない県。それともう一つ一番大きいのは、場所、立地条件ですよね。関東・首都圏と中京の中間に位置して、どこを見ても大消費地の中間にあるということで、非常に恵まれた立地条件。やはりここの特性を活かすには、自分は大規模でやるのもいいけれども、特徴を持ったものを作って、そういう大消費地の消費者を呼び込む、やはりそういう方向性が、自分は静岡県に向いているのではないかということは常々感じています。

（森田会長）
　ありがとうございます。これは県のほうから何かありますか。いいですかね、そのまま続けて。

（事務局）
　もうしばらく。

（森田会長）
　もうしばらくやらせてもらってもいいですか。はい、了解です。続けて上村さんお願いいたします。

（上村委員）
　はい、ありがとうございます。
　タカハシファームさん、キャベツを生産されていて、私自身もキャベツの生産をしてまして、大変参考になりました。高橋さんもおっしゃってたんですけど、農地が足りないとおっしゃっていて、スマート農業、もしくは大規模化、省力化機械、様々な技術を導入していく上で、やはり農地の集積、集約というものを地道に進めていくことが耕種農業にとっては生産性が向上する一番大きなファクターだと考えています。
　前にも申し上げたかもしれないのですが、担い手に集積という目標数値がありますが、ここの担い手という対象がとても広くて、ここをもう少し個人に、個々の経営体にスポットを当てた評価の仕方ができないのかなというのを、以前にもお話させていただいたのかもしれません。
　やはり一戸あたりの経営体がどれくらい農地を集約集積して、農業経営を維持できる

かというのが、これから2030年にむかって農業人口40万人になっていく中では、ここの評価をしていただく必要があるんじゃないかと考えてます。

スマート農業なんですけれども、私も衛星とか、そういったものに挑戦してはいるのですが、正直なところ、ぱっとしないという印象です。すごいコストはかかるんだけど、効果は正直見えない。もしそれに依存してしまうと、機械がトラブルを起こしたときに、何もできなくなってしまう。例えば今日、キャベツの話でいうと、定植のチャンスがなかなかない天候が不順な時に、そんな時に機械に頼っていて、その機械が止まってしまうと人間ができない。この状況が発生していて、当社の場合は、乗用の移植機にＧＰＳを付けて直進アシスト機能をつけるかどうかっていう話をしたんですけれども、一回それをやってしまって、人間がその技術を失ってしまうと、導入する移植機全てにそれを付けなきゃいけないということになり、大幅なコストアップになってしまう。これは人間ができるようにしておいたほうがいい。もしくは完全無人で、自分でほ場を、畑から畑を移動できるようになるくらいまでいったらいいかもしれないけれど、やはり人が乗らなきゃいけないという前提においては、まだあまり実用的でないなというのが私の現場の感覚です。

公道運転に関する規制等が進んできて、本当に人がいらなくなるというところまでいけるんならいいけれども、そこまでいかない段階においては、やはり通常のコストでの導入は難しくて、補助金などのお世話になりながら、そういった技術は前進していくのかと感じてます。

しあわせ野菜畑さんは、代表の大角さんとは実は就農の時から、実践アグリ大学という農林大学校で一緒に勉強していた仲で、昔から交友していたんですけれども、僕とは方向性がかなり異なっていました。私自身は慣行栽培の大規模野菜なんですけど、大角さんは昔から有機農業を志向する方向でずっと行かれていて、方向性が違うとここまで違うのかと感じています。

今日、奥様に聞いたら、600件から700件のお客さんにセットを販売していると。すごい顧客の数だなと思いました。お話を聞いてて思ったのが、大角さん達の農業というのは、農業の中でもサービス業よりだなと感じました。弊社のような慣行農業者は、できる限りの技術、資材を使って生産技術を突き詰めていくところが製造業よりで、同じ農業とはいえ、力を入れるところがかなり異なると考えました。有機農業は虫や生産物のサイズ等に困るだろうと考えていたのですが、実際は生産に関しては、とれたものをそのまま顧客に供給するので困っておらず、販売面での新規顧客開拓やその継続性の維持に対して困ってらっしゃるんだ、というのが発見でちょっと驚きました。

我々が営業で今困っているのは、価格転嫁がしづらいというところで課題を抱えています。実際に肥料価格においては、キャベツでいくと、生産物キロあたり４円程度が肥料コストだけで上がっています。しかしながらその状況の中で価格転嫁できているのはキロ当たり１円とか２円程度でとても追いつきません。全てのんでくれるお客様ばかりでもないのですが、少しずつ御理解いただきながら上げてもらっているという現状です。

いただいた資料に価格指数の推移ということでありますが、物によっては、例えばビニールハウスでは10年前との体感で比べると180くらいになっています。10年前との体感でいくとたぶん養鶏とかも建設コストものすごいですよね。そんな中で、施設園芸に関しては増産も苦しいなという状況を感じています。みんなでまとまって、設計を単純化して、施設コストを下げていくかというのは、もう農業だけではない課題だと理解しています。

私としては以上です。ありがとうございます。

（森田会長）

ありがとうございます。現場のところで実際にやられているところの御意見ということで、非常に貴重なものと思っております。

続いて落合先生なんですけれども、今日は残念ながら御都合がつかなくて現地を見られなかったんですけれども、県の施策であり国の施策であったりとか、最近の資材の高騰や農業農産物の価格形成を含めてですけれども、先生から何か御意見いただいたり、御提案いただけたらなと思っておりますけれども、よろしくお願いいたします。

（落合委員）

はい、よろしくお願いいたします。本日はお伺いできなくて大変申し訳ございません。こちらで先に、学内で会議がありましたので、そちらを優先させていただきました。

現地の資料も拝見いたしました。私から２点ほど、大変勝手なことかもしれないんですが、申し上げたいと思います。

一つは、スマート農業についてです。農業の中でどんどん色々な新しい技術を使っていくというのが、もちろん今に始まったことではなくて、例えば50年くらい前とか60年くらい前から、昔は人の手でやっていたものを、牛の力を借りたりとか、そこから機械になって、機械が大きくなっていってと、土木技術もそうですけれども、機械の技術も、昔から絶え間なくずっと発展してきて今ここにあると。それがさらに進んでいくという形になっていくと思うんですが、昔から今までの間であっても、単純に農業が以前に比べれば、身体的には楽になるとか、ということは当然あったと思うんですが、同時にそんなに沢山の人がいらなくなるということとか、環境に対する影響とか、社会的な面とか環境の面でも、色々な良い面、悪い面あると思うんですけれども、影響を与えてきたんだと思います。そういう点では、スマート農業、もちろん経営的にもうまくいくようになると。今、高齢化と、それから担い手、後継者の方がいらっしゃらないということに対する答えの一つとしては、もちろん有効なものではあるとは思うんですが、同時にもうちょっと長い目で見ると、このスマート農業がどんどん進んでいった時に、農村の社会がどういうふうになっていくのかということも、同時に並行して考えていかないといけないんじゃないかと。例えば、究極的に考えればですね、本当に無人になれば、田んぼや畑に人がいらなくなると、全員町に住んで、町の中からドローンを操作するよ

うにロボットを操作するようになるという、そういった究極的な姿になる。それはそれで一つの在り方かと思うんですけれども、そういった時に、経営とかと同じ同列で考えていいかどうか分からないんですが、例えば農村の文化とか、人のつながりとか社会とか、そういったものがどんなふうに変わっていくのかというところは、同時に考えていかなきゃいけないんじゃないかと。この食と農の審議会の中で考えるというところとはまたちょっと違うかとは思うんですけれども、そういったところにも目を向けて、同時に目を向けていかなければいけないんじゃないかと、そのように思っています。今のが一点でございます。

もう一つは、先ほど有機農業の話で、石田委員からもお話があったんですけれども、若い方が大変多いという話がございましたが、これは有機農業っていうのが農業というよりも、有機というほうに重きがあるというか、それが環境に優しいとか、それから健康に良いとか、そういったところが若い人達に受けているというか、若い人達に魅力になってるんじゃないかと。それがたまたま有機の後ろに農業が付いてるというだけで、そういうことがあるんじゃないかなと。普段学生と接していても、もちろん給料のいい大企業に行くという学生も多いんですけれども、最近流行りの言葉で「社会課題の解決」という言葉がありますが、そういった方向で目を向ける学生もとても増えてきております。そういう点で、有機農業というのは、農業というよりも、有機という部分ですね、環境に優しい、健康に良いとか、そういったところに目が向けられているんじゃないかなと、そのように感じております。

すみません、質問とかないんですが、普段思っていることを申し上げました。以上でございます。

（森田会長）

はい、ありがとうございました。先生の専門分野の視点から、貴重な御意見を伺いました。ありがとうございました。

では続いて中村委員、お願いいたします。

（中村委員）

今日は視察をさせていただきまして、ありがとうございました。２か所、それから有機野菜を使った食事ということで、大変良いお勉強をさせていただきました。

実際にこの目で見るのと、色々な資料で調べるのとでは、ちょっと違った印象がありまして、とても良かったと思っております。

私が今日気づいたことですけれども、まず、このスマート農業というのは、ごく限られた中、すごく大規模な農業をされているごく一部の方がスマート農業に取り組まれているのかなというイメージが非常に強かったんですけれども、静岡県でこれだけの方が、もしかしたらあそこで作られているキャベツを私も食べているかもしれないというような感じで、スマート農業で作ったキャベツを食べているんだというような、身近な感

じが大変いたしました。
　今、野菜にしてもその他の肉類にしても、非常に価格が高くて、消費者はあっぷあっぷしてるんですけれども、この機械化をすることによって、例えば人件費であったりとか、あるいはその高齢者の対策であったりとか、あるいは女性が農業に参画するという部分に対しても、何かこの課題を解決するきっかけになっていくのではないのかなという感じが強くしました。
　それからもう一点ですけれども、有機栽培をされていらっしゃるところでしたけれども、若いお母さん達、子育てをしている、これから幼稚園、小学校に入っていくようなお子さんをお持ちの、特にお母さんですよね、安全志向が私達に比べて非常に高いような気がいたします。より安全な食品を、それから安心して食べられるものをということで、もしかしたら有機野菜というものに関して、非常に興味がおありになるのかなと思いますけれども、まだまだちょっと価格の面で消費者の思っているところに追いついていかないので、どこまで浸透するか分からないんですけれども、非常に関心をお持ちになっていらっしゃるということです。
　また有機野菜のところにつきましては、非常に環境に優しいということで、先ほどのほ場のところでも、キャベツとか白菜でしたっけ、ちょっと植え付けの時期からちょっとこう狭まっていってなかなか大変なんだというお話を伺いましたけれども、環境も随分、私が小さい頃と比べてみて、静岡県も変わってきているんではないのかなと思いますけれども、やはりそういうものに対して、有機野菜、有機農業というのは大きな役割を果たしていくんじゃないのかなというふうにも思っております。ぜひ学校を、あるいは学校給食とかでも静岡県産の有機野菜を取り込む仕組み作りであったりとか、あるいは消費者教育の中で、有機のものについて理解していきましょう、考えを深めていきましょうみたいな、そんなようなことが進められるといいのかなというふうに本日は感じました。今日はありがとうございました。

（森田会長）
　中村委員、ありがとうございました。
　続いて野末委員、よろしくお願いいたします。

（野末委員）
　お願いいたします。今日はありがとうございました。私は法人協会の立場でお話をさせていただこうと思います。よろしくお願いいたします。
　今日、見させていただいて、大型機械を使うということは、イコール広大な大地が、ほ場整備された所が必要だっていうことの表れではないかなと思うんです。今日見たところ、もう少し広い方が、あの大型機械がのびのびと効率よく使えるんじゃないかなと思うので、もし行政側とかそちらの方で手を出していただけるようだったら、そういう農地の整備、水田なんかはかなり色んなところで農地整備がされてるようですけども、

畑作に対しては、まだまだほ場整備が完全ではないような気がいたします。

私は西部に住んでいるんですけども、西部は、道路の向こう側は工業用地になってしまって、どんどん私達のところが狭まっていくような状況に追いやられているのが現状ですけれども、静岡県の中でも本当にのびのびと農業ができるところは、それなりにちゃんと整備してあげて、そこでその役割をきちんと使い切るというか、果たされるような農地の整備が必要ではないかなと今日思いました。

それと、有機野菜ですけれども、今、色々なものが高くなって大変というお話を先ほど中村さんからもお話がありましたけれども、たしかに今は現実は高いかもしれないんですけども、先ほど私、キャベツが売価でいくらなら再生産できるのって聞いたら、158円だそうです。必ず農産物には、皆さん本当に一生懸命、色々な所でコスト削減は十分していると思うんですけれども、再生産できる金額というのが必ずあると思います。農業全般で、このラインを割ったらもう再生産できないよという価格はあると思うので、その辺をきちんと一度押さえてもらって、できるだけ、その中で価格が動いていくように、高くなりすぎたら少し抑える操作ができたら、再生産できるラインを割らない価格帯をきっちり押さえてもらったら、もっと現場がよりよくなる。縁の下の力持ちで一生を終わったんでは気の毒だと思います。本当に再生産できて、皆さんと同じようなお給料がしっかりもらえるような、休みもきちんと取れるような、残業時間もなくてもやっていけるようなそんな農業現場であれば、もっともっと若者達が農業現場に入ってくると思うんです。

今日しあわせ野菜畑ですか、素晴らしい社員さんが入っているというお話を伺ったんですけど、やっぱり農業現場もしっかり人を育てるというところをやり続けないと、現在、農の雇用で応援していただいてるので、大変助かってます。やはり育て続ける、めげずに農業現場は育て続けるという、農業現場で一生この子が働いてもらえるんだっていうふうに育て続ける覚悟で、人を雇っていかなければいけないんではないかなと私は思っております。

今、法人協会では、新入社員研修会というのを今度は４月にやるんですけれども、先生をお願いして研修会をやったり、中間社員の教育をやったり、あとマーケティングのところは県立大の先生にお願いして、生徒さんにマーケティングの勉強会を３か月くらいかけてやらせてもらってます。コロナでしばらくなかなかできなかったんですけども、今年は色んなことができまして、静岡県の法人協会の会員が 131 社いる中で、皆さん知恵を出し合って、少しでも優秀な農業者になっていくように、日々、勉強会を進めているところです。

あともう一つ、先ほど町づくりのお話がありましたけども、今私、都田町というところに住んでるんですけども、どうする家康じゃなくて、どうする都田で、町づくりを今 36 社で、マップを作りながら１か月に１回定例会やイベントをやらせてもらってるんですけれども、やっと若者が育ちました。30 代、40 代の方が今中心になって動いてくれるようになってきました。だからちょっとこの先明るいかなと思っています。やっぱり町

に住む人が元気でないとその町は明るくならないなと、思いでやらさせてもらっています。そんな感じで都田はだいぶ元気になってきたんですけど、まだまだ足りないものが沢山あります。レストランもないし、ホテルもないので、泊まるところ、食べるところが充実するといいねなんて言っています。まあそんなふうにささやかですが、地域でも頑張っております。以上です。

（森田会長）
野末委員ありがとうございました。それでは松岡委員にお願いいたします。

（松岡委員）
はい、ときめき女性の松岡です。今日のこの視察を準備してくださった県の職員の方、皆さん本当にありがとうございます。資料を見て会議をするのと、現場に行って畑を見て説明を聞くのとでは、本当に全然こんなにも違うものかと感じるものがありました。先ほどのしあわせ野菜畑さんを歩きながら畑で採った野菜を食べて、ああ、こんなにも贅沢な視察があるのかなと思って、今日はとても感激をいたしました。
そして皆様の意見も、やっぱり色んな視点から専門的に考えられて、すごく勉強になります。スマート農業の取組は、私、以前、スマート農業って本当に全然知らなくて、静岡県はこんなにも推進してるってことに驚きを受けて、私、全然縁のない農業だと思っていたんですけれども、実際に色んな機械を見せていただいて、こんなにもすごい効率の良いものかとびっくりしました。
渡邉さんが、手で植えていたのが馬鹿みたいだったとかって言うんですけど、うちでは本当に、手で植えて馬鹿みたいにやってるよってうちに帰って言わなきゃなんないなとかって思いましたけど、でも結構、植える作業って私好きなんですね。種を蒔いたり、植えるっていうのは、すごく思いを込めてやっている大好きな作業です。
でもなかなか、うちのほうでは市街地で、狭い農場、農地でやっているので、大きい機械を使うのは広い所じゃないと大変だなとか、あと金額がものすごく高くてちょっとびっくりしたので、本当に若い人が使うっていうのがリスクがあるんじゃないかなと思います。
そしてしあわせ野菜畑さんの農地は、本当に気持ちが良くて、色んな野菜を育てながら、若い人達が来て、人を育てているんだなと、ここの畑は、と思って、とてもいいなと思いました。
私も体験農園をしていて、色んな人に畑を貸し出しをしているんですけども、貸し出しをして畑を借りている人だけが使うんじゃなくて、畑が色んな人の居場所になればいいなと思って、今、畑の方と不登校の子どものための居場所作りの講座を受けています。ちょっと学校に行くのが大変だっていう子にも来てもらいたいし、社会でちょっと大変、人付き合いが苦手だよっていう若い方もいると思うので、そういう方にも来てもらいたいし、そういうみんなが集まれるような優しい場所を目指しています。

農福連携は、ちょっと目指したいんですけど、なかなかその障害者を雇用するところまではとてもいかないので、本当に、畑が色んな人の居場所になるといいなと思っています。そして、しあわせ野菜畑の大角さんは本当に学校の先生もやられていたので、自分の信念というものを持って、それをみんなに伝えるというのがすごいなと思ったんですけれども、農業って本当に、スマート農業、有機農業、色んな農業の形がそれぞれあっていいと思います。そして、それぞれの考え方を持って農業をしてくというのがあっていいと思うんですけども、それを色んな人に伝えていける手段があるといいなと思います。

テレビの番組で、ポツンと一軒家という番組が大好きなんですけれども、私のときめき女性の人達もすごく好きなんですけれど、そういう誰もいないようなところに訪ねていくと、そこで本当に頑張って、農業とか昔ながらの生活を守って暮らしているんです。そういう農家の方もいらっしゃると思います。ぜひ、県の職員の方、そういう方達のところを訪ねていって、ぜひポツンと一軒家のようなYouTubeの番組を作っていただけたら、みんなが見て、訪ねてみようかな、応援してみようかな、買ってみようかなと思うと思うので、若い人達にも届けて、そういう思いをぜひ、届けていただきたいなと思います。以上です。

（森田会長）

松岡委員ありがとうございました。じゃあ渡邉委員お願いいたします。

（渡邉委員）

私は消費者の立場から、どのように作られているのかとっても興味深く、またその食材を利用したランチもとても楽しみにしておりました。日頃は食を中心に地域の健康づくりを講話や調理実習を通して推進しています。病気の予防をはじめ、伝統料理、食品表示の見方や、スマートクッキングとして、環境問題にも取り組み、SDGｓにつなげ、地産地消や有機食品を利用することを進めております。

生協やスーパーなどでは、顔の見える野菜など、コーナーはありますけれども、私達が調理実習などで使う有機となると、少しお値段が高くなるので行政からいただいたりする予算の中では、本当に四苦八苦しております。調理実習をやっていて、有機野菜や地元の物、国産を勧めますが、教室参加者の立場になると国民年金で生活するのには、そうばかりも言っていられないと言われますが、健康のためには、あまり農薬が使われていないものの方がいいし、日本の農業や生産者の応援のためにも地産地消の推奨の話をしております。

今日、視察させていただいて、太陽の光を浴びて、のびのびと育った野菜は本当に栄養価も高いだろうと思いました。いただいてみましたら、味も濃くて、しっかり苦みもあったり、うまみもあったり食材そのものの味がしました。

生産者から伺ったことで、販路の拡大にも課題もありましたけど、私達消費者もそれ

をどのように手に入れたらいいかというのが、よく分かりませんでした。
ＱＲコードを教えていただき、やってみましたら、簡単に購入コーナーへ入れましたので皆さんに提言したいと思いました。
また、安い時には、大根１本 100 円、キャベツ 100 円で売っています。うちに帰って、この 100 円の値段で、生産者は一体いくらで出しているのかなって、主人と話すことがあります。しっかり対価が払われているのか、生活できるくらいの収入があるのか心配になります。行政や JA などが介入して、価格がきちんと生産者に入るような指導も必要と思いました。
先ほど、先生からも社会課題に関心のある若者も増えているとお聞きしましたが、そういう方達が、しっかりお給料をもらって家族を持って生活ができるようにするのには、どうしたらいいのかなということをすごく感じておりました。
また今、耕作放棄地というのが沢山ありますよね。かといって土地を欲しいという方もいらっしゃると聞きましたので、行政が介入して、欲しい方や市民農園などの紹介で農地が活用できる方法を指導してくださるとありがたいです。荒れた田畑がなくなりましたら日本の農業がもっと素晴らしくなるのではないかと思いました。よろしくお願いいたします。

（森田会長）
はい、ありがとうございました。
皆様の意見、いちいちごもっともなところがあって、それぞれの立場からというところで、特に価格について聞くと一方で 158 円の話があって、でも自分の立場でいくと、98 円安売りに手が伸びてしまうというこの弱さもあってというところで、さっき言ったいわゆる再生産可能な価格というのが、生産規模であったり地域であったり色んな作り方であったりとか、それに対してのクオリティ、品質の面でどうかとか、色んな要因が関わってくるというのがあって、なかなかその辺難しいんでしょうけども、何か一つ指標みたいなものを出してもいいのかななんて思ったりするところはあります。それは生産者にとってもそうですし、消費者にとっても一つの考えのスタートになるのかなと思ったりします。そこに当然、農家の再生産可能ですから儲けが入ってるってところが大事で、その辺のところをふまえて、それでないとやはりやっていけなんだっていうことをＰＲする。地味な内容ですけれども、そういうことも大事かなと思っております。ありがとうございます。
それとあと私のほうからなんですけども、今日視察した時に、奥様の御意見を聞けたから良かったのかなと思ったりして、こういう農業やってる旦那さんの奥さんは、旦那をどう見てるのかなと。農業のことで語る時に、大体男性がこう表に出てきて、女性の考えってほとんど聞けないんですよね。でも集落等々、その町とか社会は、半分は女性ですから、当然女性が支えてるんであろうと思っています。ユニークな取組であったり、新しい取組というのはたぶん家族あっての取組だと思うし、その辺のところを奥様がど

う見てるのかなっていうのがもし聞けたら、次の施策やこれから農業を考える時のヒントになるのかなと思っております。その辺のところは、今日、この会議で半数が女性で半数が男性という非常にいい数ですけれども、そういう意味では、女性から見た時の、今回の意見の中にもそのようなところが見えて、参考となる意見というのが沢山得られたんじゃないかなと思っております。

あとどうですかね、今日、県のほうにあまり質問をしてないのであれですけども、一つは、高橋さんから要望として出たのがですね、あの地域でやっていると自分がトップになってしまっていて、新しい先進的な地域の農業の情報が入ってこないと。スマート農業等の関係でも愛知とか、ああいう大規模でやってるところに行ってくれば、すごくもっと進んでると。だからそういう情報が欲しいというような話があったので、ぜひとも、先進地、昔あれですよね、海外に研修で農業者が行きましたね。またやってもいいのかななんて思うところがあって、幅広く県、国内外を問わず、やはり最先端の農業を見るというのがあっていいのかなと。またその逆もいいんじゃないかと思っていて、それはさっき出た農福連携もありましたけども、タイとかインドネシアでは医農連携と言うんですよね、病院が出す野菜などの食べ物を、病院の患者さんが農業をやって、そこで得られたものを食べていると。それで健康になっていくというそういう取組もあるということも聞いておりますので、色んな世界での取組を見てきて、それを持ち帰ってそれぞれが生かしてくっていうものになっていけば、もっと静岡の農業は豊かになってくんじゃないのかなと思ってます。

大角さんについては、農業というよりは、あれほど自分の農業を自分の言葉で語れると魅力が出るんだろうなと思いました。やってることは素晴らしいことだと思うんですけれども、そこに言葉が付いてることによって、人が付いてくるような感じのように私は受け止めました。

私も農家の息子ですけど、親父は農業のことはあまり語りませんでしたね。だんだん、そうなっていくと嫌いになっちゃうのかなあと自分では思うんですけれども、どんな思いで農業を、作物を作ってるのかっていうことを言葉にして、それを子どもなり消費者に伝える重要さというのがあるんじゃないかなと。その辺がマーケティングの基本だと思うんですけれども、その辺について、専門家の出雲参事に聞かないといけないかなと思っています。

あと、大学のほうからの流れでいくと、最近の社会の流れはDX、GXと言われる、デジタルトランスフォーメーションとグリーントランスフォーメーションの人材を育てるということが今強く求められております。DXの関係で言うと、いわゆるデジタル人材を25万人ですかね、作っていかなくちゃいけないというような話も出ております。農業の現場でも農業人材と、DX、GXをどうつなげていくのかというようなことが今後求められてくるのかなと思っております。特にグリーントランスフォーメーションは、イコール農業の生産活動にもほとんど重なってくるものだと思います。それがグリーンといわれる今のイメージの中でいう、いわゆる環境負荷のないような、持続可能なものに変

えていくというところがですね、世界的に求められてると。そこについては、もうすでにSDGｓを小学校の頃から勉強してきた若者達がそれを自分のやりがいとして考えてるという世界になりつつある、というのが日本の今後じゃないかなと思っています。その辺の動きを見ながら、この食料とか農業とか農村の活性化を検討するということが必要になってくるのかなと私は思っております。

勝手なことを申し上げました。あと、皆様のほうからもう一度何か、全体を通じて言い残したことがあれば、又は御質問等あれば、一言いただければと思いますけどいかがでしょうか。

（野末委員）

今、森田先生からもお話があったんですけれども、私が農林事務所にお世話になった頃は、ヨーロッパとかアジアとかによく研修に連れて行っていただいたんですよね。丸々出してもらったわけじゃないんですけども、先頭になって、農林事務所の職員さんが１人で、私達10人くらいを連れて行ってくれました。私はそれがすごく刺激になりまして、今の経営にすごく役立っています。コロナがあって色々なところが、私達の法人協会もそうですけども、なかなか世界に飛び出すことができないですが、今年は行きたいなって今言ってるんです。ぜひ先ほど石田さんからもあったように、日本の中だけで見てるんじゃなくて、やっぱり世界を見て日本を見る、外から見るっていうのは、すごく大事なことだなと思うので、ぜひ若い女性にそのチャンスをいっぱい与えてやると、これからの農家のお嫁さん達が、旦那さんを支える時に、すごく良い意見を出していくんじゃないのかなと思います。ぜひ次の若者、若いお嫁さん達、女性陣を世界に羽ばたかせてやってほしいなと思いました。よろしくお願いします。

（石田委員）

自分先に帰らせてもらうものですから。

今、女性と男性が半々だというお話で、私、今の役受けで男女共同参画型社会という、その会の審議員に出してもらってるんですけれども、その席でちょっと自分が発表させていただいたんですけれども、国際結婚してまして、タイなんですね。向こうっていうのはみんな管理職は大体女性のほうが多いんですよ、圧倒的に。だから女性のほうがやはりそういう細かさというか、コミュニケーション能力非常に高いと思ってますので、先ほどの大角さんのマーケティング狙うんだったら、奥さんがやったほうがいいかもしれない。それはちょっと冗談ですけれども、ただマーケティングが、市場がですね、やはり今までの市場とは変わってきてる。自分が一番大きい切り口になるなと思ってるのが、ふるさと納税ってあるじゃないですか、菅さんがやってくれた。自分はあのマーケットっていうのは非常に大きな切り口、あれは日本全国どこも一律のスタートラインで、よーいどんでやるものですから、自分の特徴があれば当然、消費者が関心を持ってくれるし、謳うところがないとやはり埋もれてしまう、自分はあのマーケットっていうのは

全く新しい今の市場だと思って、非常に着目してやってます。整理するとやっぱりそのマーケットっていうのが変わってきていますから、さっきのDXじゃないですけど、そういうものに常にアンテナを張りながら、あと自分でやってみて、どれがいいかなんて分かりませんからね、それをチャレンジしていく姿勢は必要だと思ってます。

（森田会長）
ありがとうございます。

（上村委員）
すみません、野末さんのお話に続けさせて頂きます。
今日、訪問させていただいた高橋さんが先進産地のことを知らないと発言されていました。同じ県内で同じものを作っていても知り合えていない。つまり交流する機会が足りていないのですね。同じものを作ってるのに。農協の部会の中だけとか、そういった既存の枠組みの中に留まって情報交換の機会がもてていなかったことを個人として残念に感じました。今度ぜひ見に来てくださいとお話できてよかったんですけれども、同じ品目での生産者同士の横のつながりが正直不足しているなと感じています。
県法人協会も同様で、全国の法人協会との絡みがすごく薄く感じています。

（野末委員）
はい。

（上村委員）
全国と県レベルの法人協会交流、色んなレベルでの生産者同士の横の交流をもっとさせて頂きたいと考えています。

（野末委員）
そうですね。この間、広島に行ってきました。今、評価もしているところです。

（上村委員）
どうやったらその生産者同士の横のつながりができるのか、原材料価格高騰の中で農産物の価格を守る、需給を調整する、そうした色んな意味を持っており、今後必要なことだろうと考えています。

（野末委員）
そうですね。はい。

（森田会長）

ありがとうございました。

石田委員ありがとうございました。それでは、ちょっと所用があってお帰りになると、ありがとうございました。

他にございますでしょうか。せっかくですから、何かご注文でも、県のほうに言っていただいても構いませんので。よろしいですか。それでは、よろしいですかね。

それでは時間の都合もございますので、以上で意見交換を終了させていただきます。委員の皆様には円滑な議事の進行に御協力いただきましてありがとうございます。それでは進行を事務局にお返しします。お願いいたします。

４　閉会挨拶

（中尾農業戦略課長）

皆様、ありがとうございました。様々な御意見いただきました。

最後に横山局長からコメントをお願いします。

（横山農業局長）

本日はどうもありがとうございました。長時間にわたりまして、現地視察も含めて様々な意見頂戴いたしまして、ありがとうございます。また、この場で色んな御意見を聞けて本当に良かったと思います。

皆さんのお話聞きながら、我々行政として何ができるのかなとか、何をすべきかなとか考えながらお話聞いてたんですけれども、やはり行政というところでできることとかやらなきゃならないことって、やはり個人ではできないことをやらなきゃならないなっていうのを感じました。

一つ具体的に言うと、例えば上村さんからありました、担い手への集積とかを考えた時に、１人がどう言おうともなかなか動かないところを、やはり地域、市町がですね、県も市町も一緒になって、この土地をこう集約していって、ここにどういう担い手を張り付けるんだっていうのを、ちゃんと皆さんの意見を集約するっていうのが必要かなと思ってまして、そういった取組というのが実は本格的になっておりまして、あと数年のうちに県内全市町で、色んな土地に、将来的に担い手はこういう人にこの土地を任せるんだというような、そういう仕組みが作られていくということを御紹介しておきます。

あと、現地の視察の中でも、こういった機械を使うには、もうちょっと広くなきゃと野末さんからもお話ありましたけど、そういったところはやはり、基盤を整備したりというと、大きい土木工事をやらなきゃならなかったりというのがあって、そういうところは順次、やはり国のお金も県のお金も使いながら、整備はやっていかなきゃなって思っております。

また、地道に担い手を育成していくという意味では、農林環境専門職大学というのを作りまして、そちらのほうで、DX、GX の話もありましたけれども、そういった高度人材は地道に育てていかなければならないというところで、こういった取組も進めておりま

す。
　そうした中で、皆様から、今日も森田先生にもお願いして、テーマとして価格の話ができたらななんて話もちょっとさせていただいていたところなんですけれども、やはり今話題にも出ましたが、コストを価格に転嫁できないという話もありました。これは前段の説明でもありましたが、流通の仕組みの中で決まっていくところもあって、なかなかまだ７割程度が流通の中で農産物というのは動いていくので、難しいところもあるんですけれども、そうはいってもというところを何とかしていかなきゃならないんですが、そこにはやはり、消費者なり、流通の理解を得なければならないってところが一番だなと考えております。コストが上がったからその分高くしてよっていう理解って、なかなか生々しすぎて難しいのかなと思ってるところで、やはり大角さんのやられてるような、ああいう有機の取組であるとか、あと省力化にこんだけ頑張ってるんだよというような取組を発信していくだとか、あとは環境保全を考えてるよだとか、あとは男女共同参画の立場でも頑張ってるんだとか、農福連携でも頑張ってるんだよっていうような、そういう付加価値を付けて、それを積極的に発信して理解を得ていくというのも一つの手かな、なんて思いながらお話を聞いてたところでございます。
　いずれにしても、今、数年前から農業、厳しい、厳しいと言われているところに、ここでコストがぐんと上がっている。状況があまり変わっていないところで、コストだけ１．何倍になっている。かなり大変な時期にきてると思います。それと並行して、午前中の挨拶でも言いましたけれども、食料安全保障の話が出てきたりだとか、SDGｓという潮流が来たりとかですね、非常に分かれ道に来てるのかなと思いまして、省力化がぐんぐん進むには、スマート農業とかを進めなきゃいけないし、だけど、手もかけたいところもあるしというところで、どこかで選択していくタイミングがあるのかな、なんて思いながらお話を聞いておりました。
　雑ぱくではございますけれども、ちょっと自分の感想だけ言って終わってしまって恐縮なんですが、今日の１日通して、現地も見ながら、皆さんの御意見を聞きながら、考えたところを述べさせていただきました。この審議会、今年度またありますので、その時にまた今日来られてない委員の方々も含めて、議論深めていければなと思っておりますので、よろしくお願いしたいと思います。
　本日はどうもありがとうございました。

５　閉会

（中尾農業戦略課長）
　それでは以上をもちまして、令和４年度第１回静岡県食と農が支える豊かな暮らしづくり審議会を閉会いたします。
　なお、第２回審議会につきましては、３月８日を予定しております。次回につきましては、今年度からスタートしました食と農の基本計画の進捗状況の評価を主な議題としまして、開催する予定でおります。

改めて開催通知は送付させていただきますので、ぜひ次回３月８日の審議会につきましても、御出席いただきますようよろしくお願いいたします。

本日は誠にありがとうございました。お疲れ様でした。